

マタイ 16 : 13 - 20 「ホップ、ステップ、ジャンプ」

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます」 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」 シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現わしたのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたがた地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」 それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

去年の神学会議も、今年の I S B 1 2 0 周年も、お土産に買って来ましたがターキッシュ・デライト、トルコ人の好物、という名前のゼリー菓子です。「イギリスに行ったのに何でトルコだ」という質問をされたんですが、わけがございいます。C.S.ルイスという英文学の教授が書きました『ナルニア国物語』の冒頭、ターキッシュ・デライトが登場するのです。わたしにとりまして、ナルニアと言ったらターキッシュ・デライト、ターキッシュ・デライトと言ったらナルニア、という思い出がございいます。このナルニア国物語におきましては、アスランという創造主なる神が、世界を維持管理するという仕事を「冬の女王」に授けるのです。世界を維持管理する大仕事ですから、これに伴いまして大きな力が「冬の女王」にゆだねられました。最初「冬の女王」は創造主に忠実にお仕えしてたんですけども、もらった力があんまり大きいもんだから、だんだん慢心して来た。ついに自分こそ世界で一番偉い存在だ、自分は神だ、と考え違いするまでになった。「冬の女王」はこうして魔女になっちゃうんです。で、「冬の女王」が子どもを取り込むワナに使うのが、ターキッシュ・デライトというわけです。

なんでこんな話をしたかといいますと、「力」ということであります。神様はわたしたちを信頼して、いろんな力をわたしたちに任せてくださってます。力それ自体は良いものです。神様がくださったものだからです。ところが「冬の女王」じゃないけれど、わたしたちは、与えられている力の素晴らしさゆえに慢

心して、力にしがみついちやう。力を一番上に立てて、神様の御心は二番目、三番目だ。いや、ほんとのところ神様なんてどうでもいいんだ、というぐらい慢心してしまう。力にしがみついて自分が神になっちゃうという、これが人間の最も罪深い罪なんだ、ということをC.S.ルイスはファンタジーという表現形式で描きました。それが『ナルニア国物語』です。蛇足ですけど、『不思議の国のアリス』を書いたのはルイス・キャロルでして、C.S.ルイスとは全く別人です。よくルイス・キャロルとC.S.ルイスをごっちゃにしてる人がいるもんですから、つけ足しで申し上げました。

さっき読んでいただいた聖書箇所というのは、まさに神様の力がペトロにゆだねられたという、力が授けられた瞬間であります。この神様の力がどんな凄いものであるか、イエス様が神の力を使って次々と驚くべきみわざをなさるのを、ペトロはずっとおそばで目撃しておったんです。今日の聖書箇所からちょっとさかのぼりますと、イエス様は五つのパンと二匹の魚で五千人のお腹をいっぱいにしてる。しかも一回で終わりじゃない。次は七つのパンとちょっとの魚で四千人のお腹をいっぱいにしてる。女子どもを数に入れずに五千人、四千人でありますから、女子どもを加えたら一万人、二万人のお腹をいっぱいにしたことになる。そればかりじゃない。イエス様は水の上を歩くという奇跡をなすった。それを全部まじかに見て、ペトロは心に深く確信するところがあった。だからイエス様が「ペトロよ、おまえはわたしを何だと思うかい」とお尋ねになったとき、迷わずご返事申し上げたんです。「イエス様、あなたこそメシア、神の子、救い主です」

メシアというのをギリシャ語に訳しますとキリストです。イエスキリスト、イエスキリストと、よく言いますが、これは、イエスこそメシアだ、イエスこそ救い主だ、とゆうてる意味になる。イエスキリストすなわち「イエスこそメシアだ」という意味であります。

何をイエス様が喜ばれるって、ご自分が正しく受け取られること。これほどイエス様が喜ばれることはない。こういう人がよくいるでしょう。「イエスは歴史上の人物だね」「イエスは偉大な宗教家だね」「イエスはキリスト教の創始者だね」「イエスは偉大な人物だね」 こういう答えであってはイエス様は満足なされない。けども「イエス様、あなたこそメシア、神の子、救い主です」と答える人がいるなら、イエス様は最高にお喜びになる。なんとなれば、イエスはそういう者だから。ほんとにイエス様は、メシア、神の子、救い主だからです。

で、正しいご返事をしたペトロのことをイエス様はことのほか喜ばれて、イエス様はペトロを深く信頼なすって「天国の鍵」をお預けになりました。西洋の漫画で、天国に行きますと、門のところで門番してるのがペトロだという。手に鍵を持ってるという。そういう描写が出て来ます。ペトロは天国の鍵を授かった。天国の鍵っていうのは、神様の大きな力を象徴しております。神様の大きな力が、いまやペトロにゆだねられた。力を受け取った瞬間です。イエス様はおっしゃった。「ペトロよ、おまえが地上で願ったことは天においてその通りになるよ。必要なものを何でもイエスの名によって願ったらいい。その通り与えられるから。そして、ここが大事なところだが、地獄の勢力はおまえを邪魔することが一切できないよ」という、驚くべき約束であります。

これはひとりペトロだけの話じゃありません。「おまえたち、必要なものは何でもわたしの名によって願いなさい、そうしたら与えられるよ」とイエス様は約束してくださった。ヨハネ福音書 14 章 13 節にそう書いてある。これはペトロだけじゃない、わたしたちみんなへの約束であります。わたしたちが「イエス様、あなたこそメシア、神の子、救い主、キリストです」と本当に心から信じて、微塵も疑わず信じて、その信仰に立って「イエスの名」でもって祈り求めるなら、必ず与えられる、という約束であります。しかも、地獄の勢力は邪魔ができない。わたしたちがイエスの名によって祈り求めると、それはイエス様ご自身が祈ってるのと同じにみなされるんだという。驚くべき約束であります。

ですから、わたしたちは毎日お祈りの中で「イエスの名によって祈ります」と言うとき、こう考えなくちゃいけない。いまこうしてお祈りしているのは、わたしが祈っているんだけど、イエスの名によって祈っているがゆえに、これは、イエス様ご自身が祈っているのと同じにみなされるんだ。そう思ってお祈りしなきゃいけない。そう思って祈るんなら、わたしたちの祈りは変わってまいります。これが「天国の鍵」を使って祈る、ということであります。

しかしキリスト教的生活というのは、このレベルで止まる話ではない。今日の説教題を「ホップ、ステップ、ジャンプ」としましたけども、最初のレベルで終わってたら、ホップの段階で終わっちゃってたら、永遠に未完成の三段跳びであります。ホップの次のステップへ行かなきゃ、ほんとうではありません。

そこでわたしたちが読まなきゃいけないのがマタイ 16 章 21 節以下 28 節であります。イエス様は神様の力を弟子のペトロにおゆだねになった。じゃあ、

あとはどうするんだ。イエス様はイエス様のほうで、引き続き神様の力を使い続けるのかと思ったら、そうじゃなかった。イエス様は重大な決意をお述べになるのです。こうであります。「イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた」という。これはすなわち「わたしは神様の力を手放すよ」(16:21)という、はっきりした宣言であります。

このことは、イエス様の心の第一を占めてたのが、全然「力」ではなかった、ということを示している。イエス様の心の第一を占めてたのは、どこまで行っても「父なる神様」のお心でありました。父の心が第一である。父の心が第一である。実にイエス様は「父の心を行うことこそ、わたしのパン、わたしの食物、わたしの命である」ということをヨハネ福音書4章34節で言うておられる。イエス様は神様の力をお使いになるけれども、それは、父なる神様がそうしなさいとおっしゃる限りにおいて、力を用いて、いろいろみわざをなさるのだ。けれども、父なる神様が「さあ、いよいよ時が来た。力を手放して、無力になって、十字架につけられて、死になさい」とおっしゃるんなら、イエス様はいつでもそうする用意ができています。力を手放す用意が来ている。父の心が第一、力が第二であります。

これはいったい、力の取り扱いについてのわたしたちの姿勢に、切り込んで来るメッセージであります。わたしたちだって神様から力をゆだねられている。霊的な賜物が与えられている、健康が与えられている、生活の場所が与えられている、仕事が、家族が、財産が、奉仕の場所が、いろいろな能力が、いろいろな楽しみが、与えられている。それはみんな100パーセント良いものばかりです。1パーセントだって悪いなんてありやしない。神様がくださった力でありますゆえに、みんな良いものであります。否定すべきものが何もない。だが、もしわたしたちが、力にしがみついてしまったら、どうなるのか。心の第一を占めてるのが「力」になっちゃって、父なる神様の御心は二の次、三の次。いやほんとのところ、父なる神の御心なんて知ったこっちゃない。わたしはわたしの持っている力で好きなようにやらしてもらおう、ということになってやしないか。偶像礼拝というのは、何も異教徒がお地蔵さんを拝むのがけしからん、という話ではない。偶像礼拝というのは、わたしたちキリスト者の心において、力が第一となっちゃって、父なる神の御心はわきへよけられて、御心なんて知ったこっちゃないという。それが偶像礼拝であります。

ペトロは何とゆうたか。「先生、力を手放すだなんて、そんな馬鹿なことがあっちゃありません。先生はわたしたちの大將なんだから、しっかりしてもらわなくっちゃ困るんだ。どうぞ先生、いままでどおり変わらずに、どしどし神様の力を使って奇跡を起こしておくんなさい。先生なら五千人、六千人、一万人、いや百万人だってお腹をいっぱいにして、みんなの心をつかまえられるじゃないですか。十字架にかかるなんて馬鹿な話はよしてもらいたいもんだ」　　こういうふうにペトロは主イエスに意見したのであります。

ホップ、ステップ、ジャンプという、ペトロはホップの段階からステップの段階へ行けなかったんです。ステップの段階、父なる神の御心をどこまでも第一として、そうするのが御心なら、いつでも力を手放す用意がありますよ、という次のステップにペトロは進むことが出来なかった。

イエス様は怒ってペトロにおっしゃった。「サタン、引き下がれ。わたしが父のお心に従うのを、おまえは邪魔してる。おまえの眼中には、父のお心なんて全然ないではないか。自分のことばかり考えて、力にしがみついているのだ」

その上でイエス様はこうおっしゃったのです。「わたしについて来たいと本気で思うなら、力にしがみつくのをやめて、力を手放して、父なる神のお心に従う決心をすることだ。それが十字架を負うということだ。自分の力にしがみついて上手くやろうとする者は、神と自分との太いつながり、太いパイプを失うことになる。だが、父のお心に従って力を手放す用意のある者は、神と自分との太いつながり、太いパイプをずっと保つことになる。力にしがみついて願ったとおりかなったとおり全部首尾よく行ったところで、もし神と自分との太いつながり、太いパイプが切れてしまったら、全部無駄じゃないか。神と自分との太いつながり、太いパイプ。これこそ唯一無二の尊いものだよ」

もちろん、むやみやたら何でも力を捨てればいい、という話じゃありません。神様がくださる力は１００パーセント良いものなんだから、めったやたら捨てていいものではありません。神様がそうしなさい、とおっしゃる限りにおいて、わたしたちは力をありがたく使わせてもらうのです。けれど、１００パーセント良いからと言って、それにしがみついて、力が第一、神様が第二になっちゃっちゃいけない、という話です。父なる神様が「さあ、力を手放す時が来たよ」とおっしゃるなら、その時は、わたしたちは喜んで力を手放さなきゃなんない。手放せなかったら、わたしたちはペトロと同じだ。ホップ止まりのクリスチャンだ。次のステップに行けてないクリスチャンってことになります。

ホップ、ステップ、ジャンプである。ステップで終わりではなく、さらにその先にジャンプがある、ということであります。最後にわたしたちはマタイ 17 章 1 節から 8 節を読まなきゃなりません。

いよいよ力を手放して、十字架にかかるという覚悟を明らかにしたイエス様は、弟子の筆頭格のペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけ連れて、高い山に登りになりました。山のとっぺんでイエス様のお姿が変わりました。栄光に光り輝くまばゆい姿にお変わりになったのです。勝利者イエスの栄光であります。

わたしたちにどうも解せないのは、力を捨てる覚悟を決めたという、力を捨てることでもって、どうして栄光に輝くことができるのか。逆じゃないのか。普通考えたら、ぎゅっと力を握りしめて、力を全部使いきればこそ、栄光に輝けるんじゃないか。これがわたしたちの浅はかな考えであります。

そうじゃないのです。父なる神のお心に全く服して、父のお心のままに力を手放す覚悟を決めたイエス様。この点において、イエス様はご自分の全部を残らず全て父なる神様におささげになった、ということになるのです。イエスはご自分のすべてを父なる神に与えつくした。すると、父なる神様のほうでも、父なる神ご自身のすべてをイエス様におささげになるんです。父なる神がその一切すべてをイエス様に与えつくされるという。これが完全な相互の関係であります。イエスはご自分のすべてを父に与えたもう、ゆえに、父はご自分のすべてをイエスに与えたもう。この完全相互の関係が 5 節に明瞭に見えております。「光輝く雲が彼らを覆った。すると、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた」 イエスは全く父なる神に服していたもう。同時に、父なる神は全くイエスに服していたもう。完全にひとつの思いとなっております。

イギリスのジョージ・カッティングという人はこう言いました。「私は神なしでは生きられません。神は私なしでは生きられません」 こりゃ衝撃的な発言だけれども、この相互の関係を表しております。

この相互の関係。この相互の関係を生きることが、ホップ、ステップ、ジャンプの「ジャンプ」のレベルのキリスト者だ。わたしたちは自分に与えられた力にしがみついて、自分の思い通り必死にやって、小さな栄光を得ることはできるでしょう。だが、まばゆいばかりに輝くほんとうの栄光は、この相互の関係

から輝き出て来る栄光であります。すなわち、イエスはご自身の一切を父なる神に与え尽くしたもう。ゆえに・そして・同時に、父なる神はご自身の一切をイエスに与え尽くしたもう。こうして、イエスと父とが完全にひとつの心、ひとつの思いになるという、ここから、ほんとうの、永遠の、まばゆい栄光が、輝き出てまいります。で、わたしたちも、そうなるようにと呼ばれておるんです。わたしたちが自分の一切を父なる神様に明け渡し、おささげする。すると、この関係は一方通行ではない。ぜんぜん一方通行ではない。わたしたちが自分の一切を父なる神に明け渡すと、父なる神はご自身の一切を、わたしたちに明け渡し、与え尽くしてくださる。かくてパウロがエフェソ書3章19節の御言葉が実現するのです。「あなたがたがついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。アーメン」

わたしが神様にすべてを明け渡し、与え尽くすとき、神様はわたしにすべてを明け渡し、与え尽くしてくださる。両者はこうして、ひとつの心、ひとつの思いとなる。この相互の関係がホップ、ステップ、ジャンプの「ジャンプ」であります。

ところが先ほどの選抜メンバーの三人のお弟子は、高い山のとっぺんで、肝心要のところを理解してなかった。弟子たちはイエス様の栄光のすばらしいさまを見て、感動して、こう言った。「先生、すばらしい栄光じゃありませんか。記念に写真を三枚とって、それを額に入れて三つの『ほこら』にきれいに飾って、いつまでもお祭りしようじゃありませんか」

残念な弟子たちです。イエス様の栄光の輝きが、どっから出て来るものなのか。そこを考えなきゃいけない。いま・この瞬間、イエス様はご自身を全く父なる神様におささげしているという、それゆえに、父なる神様もまた全くご自身をイエス様にささげておられるという、この、いま・この瞬間の「相互の関係」から出て来る栄光の輝きであります。

わたしたちは、自分を神様にまったくささげるというお祈りを、昔したことがあるでしょう。昔そういうお祈りを恵の座でしたことがある。十年前の何月何日にそういうお祈りをしたことがある。そう言えば兵士入隊した時に、そういうお祈りをしたことがある。下士官に任命されたときに、初めて聖潔のお恵みを受けたときに、自分をまったくささげるお祈りをしたことがある。そういう「過去」があるかもしれない。

だけでも、自分をまったく神様におささげするという、それゆえに、父なる神様がご自身をまったくわたしたちにささげてくださるという、この相互の関係は、昔一回だけあって、あとは記念写真におさめて、ずっと額に入れて飾っておいていい、というようなものではありません。この相互の関係は日々・瞬間・いま・このとき・たえず新たにされるべき関係であります。大切なのは、いま・この瞬間、自分をまったく神に与えているということ、それゆえに、神が神ご自身をまったくわたしたちに与えていてくださるということ。この相互の関係が、いま・この瞬間、新たにされているという、ここが肝心要であります。

I S B 1 2 0 周年の最後の日曜にロンドンのウェストミンスター中央メソジスト教会で記念の聖別会が行われまして、リンダ・ボンド大將が説教なさいました。「楽隊員の聖潔が必要だ」という説教をなさいました。恵の座が開かれました。たくさんの若い楽隊員たちが涙を流してお祈りをしているんかと思ったら、若い者だけじゃない。中將もひざまづいていた。イギリス軍国の司令官夫妻もひざまづいていた。そうやって自分を神にささげてたんであります。

「自分をまったく神に明け渡した」「まったく神様におささげした」というお祈りは、昔一度やって、一回こっきりで終わり、もうあれで十分だ、というものではありません。いつも・たえず・つねに・続けて・新たになさなければなりません。自分をまったく神様におささげする、ゆえに、神様もご自身をまったくわたしにささげてくださる、というこの相互の関係が、いま・この瞬間、新たになされていること。これがホップ、ステップ、ジャンプの「ジャンプ」であります。どうかわたしたちみんな、ジャンプのクリスチャンでありたい。そう願うのであります。祈りましょう。